論文

フランス語の前置詞 en の周辺的用法について

武本　雅嗣

1. はじめに

フランス語には、英語の前置詞 in および into に相当する前置詞が 2 種類ある。すなわち、俗ラテン語の deintus（< de intus "from within"）に由来する dans と、英語の in と同根で印欧祖語の *en にまで遡れる en である。これらは、英語の前置詞 in が区別しない異なる概念を明示的に区別している。

(1) a. She is { **in** the living room / **in** good health }.
　　b. Elle est { **dans** le salon / **en** bonne santé }.
(2) a. He lives { **in** this town / **in** town }.
　　b. Il habite { **dans** cette ville / **en** ville }.
(3) a. She spoke { **in** French / **in** perfect French }.
　　b. Elle a parlé { **en** français / **dans** un français impéccable }.

統語的には、dans には規則的に限定詞付きの名詞が結合し、en には多くの場合限定詞なしの名詞が結合する。意味的には、ごく大まかに言えば、dans は輪郭の明瞭な具体的有界内・個別的有界内を、en は輪郭の不明瞭な抽象的有界内・非個別的有界内を表す。

フランス語のこのような 2 種類の前置詞の使い分けはロマンス語の中でも特殊である。スペイン語・ポルトガル語・イタリア語においては、同様の文法化によって生じた dentro "within, inside"（< de intro "from within"）はもっと限定的な意味を表しており、フランス語の dans ほど多用されない。具体的な場所を表す名詞の場合、(4a) の英語に対応する文としては、フランス語では (4b) のように en の使用は不可能だが、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語では (4c-d) のようにそれぞれ en、em、in が用いられる [1]。

(4) a. There is a cat **in** the garden.
　　b. Il y a un chat { ***en** le jardin / **dans** le jardin }.
　　c. Hay un gato **en** el jardín.
　　d. Há um gato **no** jardim.
　　e. C'è un gatto **nel** giardino.

かつてはもっと幅広く使用されていたフランス語の en は、本来の主要な用法を台頭してきた前

1) ロマンス諸語のこの種の前置詞の使い分けについては、時間用法も含めて別稿で論じる。

置詞 dans に譲り、国名などは除いて、具体的な空間内をほとんど表さなくなっている[2]。要するに、フランス語では、新旧の前置詞の間でいわば「政権交代」が起こったのである。

このように、フランス語の en は本来の基本的用法が制限されてしまっているのだが、それでもその用法は多様で、次のような英語や他のロマンス諸語の同根前置詞にはあまりみられない周辺的な用法を持っている[3]。

(5) Je lui ai donné un livre **en** cadeau.
'I gave him a book as a gift.'

(6) Il a travaillé **en** professionnel.
'He worked { like a professional / as a professional }.'

前置詞 en に関する先行研究は多く、最近では *Langue française* の 178 号が Préposition EN と題する特集を組んでいる。しかしながら、本稿で取り上げる類の用法については、言及は散見されるものの、本格的に論じたものはあまりない。管見では、この用法のみに焦点を当てた論考は Vigier (2013a) だけである。彼は (6) のような事例を取り上げて、en NP が参与者（主語名詞句）の変化の結果の一時的状態を表すということを指摘している。彼の意味論的分析は詳細で、その見解は納得できるものである。ただ、考察対象は en NP の NP が人間の場合に限定されており、また、問題の用法と他の用法との関連性については関心事ではないようである。そこで、本稿では、(6) だけでなく (5) のような事例も含めて、en のこのような周辺的用法について認知意味論的観点から分析し考察することにする。

2. en NP と comme NP の相違

ここで取り上げる en の用法は comme の用法に近いように思われるが、もちろんまったく同じ意味を表しているわけではない。まず、両者の間の用法・意味の違いを明らかにしておく。

2.1 comme NP の冠詞の有無

フランス語の comme はスペイン語・ポルトガル語の como やイタリア語の come と同根で、ラテン語の quomodo "how"（< quo modo "in what way"）に由来するが、疑問詞としての用法は comment に任せ、主に感嘆詞や接続詞の機能および前置詞的な機能を担っている。comme の

---

2) 古フランス語では en も限定詞と結合する傾向があり、定冠詞との結びつきとしては、'en l''（en l'air 等）や 'en la'（en la matière 等）は少し残っているが、'en le' と 'en les' については、それらのかつての縮約形（ el > eu > ou, au と els > ès）も含めほとんどみられない。なお、次のような一見非論理的な前置詞の使い分けは、'en le' と 'en les' の縮約形と 'à le' と 'à les' の縮約形 au, aux が混交したことに起因している。
(i) Elle habite { en France / au Japon / aux Etats Unis }.
'She lives { in France / in Japan / in the United States }.'

3) この周辺的用法はフランス語に固有のものではない。(5) のような en の用法はイタリア語の in "in" にもみられる。
(i) Ho ricevuto un orologio **in** regalo.
'I received a watch as a gift.'
ただし、(6) のように続く名詞が人間の場合は、イタリア語では in ではなく da "from, by" や come "like, as" が用いられる。
(ii) Te to dico **da** amico.
'I'm telling you as a friend.'

前置詞的用法は、次のように英語の like や as に大体相当する。

(7)a. Il parle **comme** un professeur.
'He speaks like a teacher.'
b. Il parle **comme** professeur.
'He speaks as a teacher.'

ここで注目すべきは、(7a) の「～のように」という意味の場合は comme に続く名詞は不定冠詞を伴っているのに対し、(7b) の「～として」という意味の場合は無冠詞になっている点である。冠詞の有無については統語的・意味的に説明がつく。Fuchs (1999) の議論を踏まえて解説する。

まず、「～のように」という意味の場合に限定詞を伴うのは、統語的に当然のことである。comme の前置詞的用法はその接続詞用法に由来しており、(8a) のように述語が明示されなくても、背後に (8b) のような叙述関係があるからである。

(8) a. Jean se comporte **comme** les autres. (Fuchs 1999)
'Jean behaves like the other.'
b. Jean se comporte **comme** le font les autres.
'Jean behaves as the others do.'

要するに、「～のように」という意味の場合の comme NP の NP は物理的存在を指示し、本来は接続詞 comme の節中の主語なので、成句的表現を除いて、限定詞を伴うのである。

一方、「～として」という意味では冠詞を伴わないことが多いのは、comme に続く名詞が存在としての人や物を指示せず、属性を表すことが多いからである。(9a) を例にとると、secrétaire は主語 Marie の属性であり、存在を指示してはいない。この裸名詞の機能は、(9b) の記述文の無冠詞の属詞（補語）と同等である。

(9) a. Marie travaille **comme** secrétaire.
'Marie works as (a) secretary.'
b. Marie travaille. Elle est secrétaire.
'Marie works. She is a secretary.'

もちろんこの意味でも、その名詞が一個体を表す場合には限定詞を伴う。人間名詞であっても、それが職業や資格ではなく部類や種を表す場合には、その一メンバーとして同定することになるので不定冠詞を伴うわけである。

(10) Tout le monde le considère **comme** un génie.
'Everyone considers him as a genius.'

このことは、部類・種を表す名詞が記述文ではなく同定文で用いられて不定冠詞を伴うのとパラレルである。

(11) a. Messi, c'est un génie.
'Messi, he is a genius.'
b. *Messi, il est génie.

2.2 comme NP と en NP の意味的相違

では、comme が用いられた場合と en が用いられた場合ではどのような意味の違いがあるのだろうか。Fuchs(1999) を参考にして、以下の 3 つの用法の間のニュアンスを明らかにする。

(12) a. Jean travaille **comme** maçon. (Fuchs 1999)
'Jean works as a bricklayer.'
b. Jean travaille **comme** un maçon.
'Jean works like a bricklayer.'
c. Jean travaille **en** maçon. (*Ibid.*)
'Jean works { as a bricklayer / like a bricklayer }.'

(12c) は (12a) にも (12b) にも解釈可能なので、一見この種の en は comme の限定詞の有無が関与する多義性を担っているように思われるが、comme のどちらの用法とも微妙に異なる意味を表している。'comme + ø N' は主語が N の属性を持っている場合に用いられ、'comme + Det N' は、主語の行為の仕方・動作の様態が N の指示対象と同様の場合に使われる。そして、'en + ø N' は、主語がその姿かたち・振る舞い・役割をしている場合に使用される。したがって、事実の前提が三者三様である。(12a) の場合はジャンが煉瓦職人であることは事実であり、「ジャンは煉瓦職人として働いている」という意味になるのに対して、(12b) の場合はジャンが煉瓦職人でないことが事実であり、「ジャンは煉瓦職人のように働いている」という意味になる。それに対して、(12c) の解釈は二通り可能である。実際に煉瓦職人なら、「ジャンはいかにも煉瓦職人らしく働いている」という意味になり、実際はレンガ職人でないなら、「ジャンは煉瓦職人 (になっているか) のように働いている」という意味になる。このように、comme NP と en NP では、発話者 (認知主体＝概念化者) の事態の捉え方が違っているのである。'en + ø N' については次章で詳しく検討するが、示唆的な例を引用しておく。(13a) は (13b) のようにパラフレイズできる。

(13) a. En 1991, lors de cette délicate affaire, Mitterrand a agi **en** président. (Vigier 2008)
'In 1991, facing that thorny issue, Mitterand acted like a true President.'
b. En 1991, lors de cette délicate affaire, Mitterrand a été « président » dans son action. (*Ibid.*)
'In 1991, facing that thorny issue, Mitterand was the "President " in his action.'

(13a) の 'en président' は「大統領のように」という意味でも「大統領として」という意味でもない。当時大統領職にあったミッテランが、難しい問題への対応の際、「大統領然として」行動したということを表しているのである。

3. en NP の認知意味論的分析

Vigier (2013a) は (6) のような事例を取り上げて、主語名詞句と 'en + ø N' の間に二次叙述があるとみて、'en + ø N' が変化の結果状態にあることを表すと指摘している。そしてその一時的状態の意味は前置詞 en の意味に起因していると結論づけている。しかしながら、en の意味とは何なのかは明確にされていない。そこで、ここからは視点を変えて、認知言語学の立場から分析し、とくに 'en + ø N' の多義性が何に起因し、変化の結果の一時性がなぜ保証されるのかを考察することにする。

3.1 dans NP と en NP のスキーマ

Lakoff & Johnson (1980: 30-32) が「状態」「時間」「視界」「活動」などの表現に反映された概念メタファーの存在を指摘して以来、英語の前置詞 in は、CONTAINER schema（容器のスキーマ）を具現化する前置詞として取り上げられることが多い。ここでは、次のような例に認められる「状態は場所である」や「状態は容器である」というメタファーに着目し、フランス語の en の周辺的用法の動機づけを探ることにする。

(14) a. He's **in** love.
b. He fell **into** a depression. (以上 Lakoff & Johnson 1980)

冒頭でも示したが、フランス語では、(15a) のように対象が空間内部に存在する場合や (15b) のように対象が移動して空間内部に存在する場合には dans で表示され[4]、そして (16a) のように対象が状態内にある場合や (16b) のように対象が変化して状態内にある場合には en で表示される。

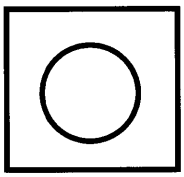
(15) a. Paul est **dans** la cuisine.
'Paul is in the kitchen.'
b. Paul est entré **dans** la cuisine.
'Paul entered the kitchen.'
(16) a. Paul est **en** colère.
'Paul is angry.'
b. Paul s'est mis **en** colère.
'Paul got angry.'

概念スキーマに着目すると、(15) のような dans によって具現化される事態は図 1 のようなスキーマで捉えられ、(16) のような en によって具現化される事態は図 2 のようなスキーマで捉えられると考えられる。図 1 の実線の四角は輪郭の明瞭な個別的・特定的容器を表し、図 2 の破線の四角は輪郭の不明瞭な非個別的・非特定的容器を表しており、3 次元的でも 2 次元的でもあり

---

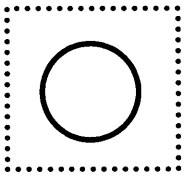
4) フランス語の dans は英語の into に意味的に対応しているようにみえるが、方向性の意味は動詞によるものである。次の例文の dans が表示しているのは「着点」ではなく「起点」と解される。
(i) Il a pris un revolver dans le tiroir. (平塚 2008)
'He took a revolver out of the drawer.'

うる。



dans Det N

図 1



en ø N

図 2

基本的に、メタファーによる用法拡張においては、元領域の構造が先領域に写像されて同じ形式がとられるのだが、部分的に違ってくることもある。場所表現から状態表現へのメタファー的拡張に関して、英語では状態の表示も同じ前置詞 in が用いられるのに対して、フランス語では状態の表示は場所を表示する dans から en に変わる。そして、場所移動から状態変化へのメタファー的拡張によって、変化後の状態の表示も移動先を表示する dans から en に変わる。かくして、変化の結果を表示する前置詞としては en しか用いられなくなっているのである。

(17) La chenille se transforme **en** papillon.
'A caterpillar transforms into a butterfly.'

3.2 周辺的用法の en NP の概念化

では、問題の 'en + ø N' の周辺的用法の分析に移ろう。まず、多義性について考察する。ここで、英語にもこれに類する 'in + ø N' の用法はあるが、用いられるのは比較的漠然とした抽象的な概念を表す名詞であることをおさえておきたい。

(18) I gave him some money **in** recompense for his service.
(19) I took many pictures **in** memory of the trip.
(20) He offered me this watch **in** token of gratitude.

フランス語の 'en + ø N' の周辺的用法の特殊性は、その N が (21) の「プレゼント」や (23) の「大人」といった通常は具体的な対象を指示するために用いられる普通名詞であることにある。

(21) J'ai reçu cette montre **en** cadeau.
'I received this watch as a gift.'
(22) Ma mère m'a donné cette bague **en** souvenir à la fin de sa vie.
'My mother gave me this ring as a keepsake at the end of her life.'
(23) Il a agi **en** adulte.
'He acted as an adult.'
(24) Marie a répondu **en** femme prudente. (Vigier 2008)
'Marie responded { as / like } a wise woman.'

ただ、'comme cadeau' に変換可能な 'en cadeau' における cadeau は、実体としてのプレゼントを指示しているのではなく、「プレゼント」の概念を表しているだけである。実際にプレゼント用の箱や包装に入っているかどうかは問題ではない。この 'en cadeau' は、物理的にプレゼントになっていることを表しているのではなく、心的にそのかたちになっていることを表しているのである[5]。同様に、'en + ø N' の N が人間名詞の場合も、その人間そのものになっていることを表しているのではない。認知主体＝概念化者が、一次叙述の事態の際、主語の指示対象が変化してその N の概念に移行して当てはまっているように捉えていることを表している。このような捉え方によって、前章で示した (13a) のように、普段は目立たない属性が顕著になっていることを表すこともあるのである。

この用法の多義性については、限定詞の付加の可否に留意する必要がある。dans に続く名詞が規則的に（必ず）限定詞に伴われるのに対し、en に続く名詞は原則的に（通常）限定詞に伴われないわけであるが、とくにこの周辺的用法は、たとえ形容詞が付加されても冠詞類をまったく受け付けない。変化の結果を表す用法と比べてみよう。

(25) Coupez la viande { **en** gros morceaux / (?) **en** de gros morceaux / ***dans** de gros morceaux }.
'Cut the beef into large pieces.'

(26) La grenouille se transforma { **en** beau prince / (?) **en** un beau prince / ***dans** un beau prince }.
'The frog turned into a handsome prince.'

(27) Je lui ai donné un livre { **en** petit cadeau / ***en** un petit cadeau / ***dans** un petit cadeau }.
'I gave him a book as a small gift.'

(28) Il s'efforce d'agir { **en** soldat vaillant / ***en un** soldat vaillant / ***dans** un soldat vaillant }.
'He is trying to act like a brave soldier.'

形容詞の付加によって下位カテゴリーを示すようになっても、いずれの用法でも en から dans への変換は不可能である。しかしながら、不定冠詞の使用については、変化の結果を表す用法の場合は (25) (26) のように容認されるのに対して、問題の用法の場合は (27) (28) のようにまったく許容されない。このことから、この周辺的用法で用いられる名詞は、たとえ下位カテゴリーであっても、常にその概念しか表さないということがわかる。つまり、それは決して指示的な意味にはならないということである。まさに、この名詞の非指示性こそがこの用法の多用な解釈を可能にしているのである。

では、次に、変化の結果の一時性について検討しよう。まず、Vigier (2008) の興味深い例文を引用する。二次叙述を構成する 'en + ø N [+human]' がコピュラ文でも用いられるかどうかのテ

---

5) ここでは対照分析はしないが、このような en NP と comme NP の意味的類似性は、日本語の「～ニ（シテ・ナッテ）」と「～トシテ」の意味的類似性と相関関係がありそうである。

ストになっている。

(29) a. Au bal masqué de Luc, Marie est arrivée **en** nonne. (Vigier 2008)
'At Luc's masquerade, Marie arrived with a nun's appearance.'
b. Au bal masqué de Luc, Marie est arrivée. Elle était **en** nonne. (*Ibid.*)
'At Luc's masquerade, Marie arrived. She dressed up as a nun.'
(30) a. Marie a réglé cette affaire **en** femme de tête. (*Ibid.*)
'Marie sorted out this affair as a capable woman.'
b. Marie a réglé cette affaire. *Elle était **en** femme de tête. (*Ibid.*)
'Marie sorted out this affair. She was a capable woman.'

'en + ø N [+human]' は、コピュラ文では、(29b) のように N の象徴的な服を纏っているという外見上の解釈しか許さない。一方、二次叙述文では、「変装・仮装」だけでなく (30a) のように「変質」「属性の顕在化」の解釈も許す。この周辺的用法が表す意味に通底するのは、「変化の結果の一時性」である。それを含意するのは、'en + ø N [+human]' が二次叙述の述語的要素になっているからである。ただ、この前置詞句は次のような二次叙述文における形容詞とは振る舞いが異なっているように思われる。

(31) Jean est entré **tendu** dans le salon.
'Jean entered the living room nervous.'
(32) a. ??Jean est entré **poli** dans le salon.
'Jean entered the living room polite.'
b. Jean est entré **très poli** dans le salon. D'habitude il ne l'est pas tant.
'Jean entered the living room very polite. Usually he isn't so polite.'
(以上 Takemoto 1995)

二次述語の形容詞として、(31) の tendu "nervous" は stage-level なのでまったく問題ないが、(32a) の poli "polite" は individual-level なので容認しがたい。しかしながら、(32b) のように強意の副詞 très "very" が付加されて、コンテクストによっても一過性のことであることが明白になれば、stage-level とみなされて許容されるようになる。このように、stage-level にもなりうる一部の属性を表す形容詞の場合、変化の結果の一時的状態であることは言語レヴェルでは強意の副詞に頼らざるをえない。要するに、このような強意詞は、変化を明確にするマーカーの役割を果たしているわけである。では、周辺的用法の 'en + ø N' の場合は、名詞が属性を表すにもかかわらず、なぜ変化の結果一時的にそうなっていることを保証するマーカーは必要ないのであろうか。それは、前置詞 en が変化用法および状態用法の機能を担っているからだと考えられる。つまり、en の変化後の結果を表示する機能と抽象的概念を有界的 (bounded) に表示する機能によって、「変化性」と「一時性」は保証されているので、強意詞に頼る必要はないのである。

4. まとめ

本稿では、あまり分析がなされていない en cadeau や en maçon タイプの 'en + ø N' の用法

について、先行研究を踏まえつつ、認知言語学の視点に立って分析し考察を行った。周辺的用法は中心的用法からの拡張用法であるとの見方をとり、この特殊な用法の動機づけを探った。とくにその統語的・意味的特徴に着目し、概念化者の「対象の抽象概念への主観的移行」の捉え方に基づいたこの用法の多義性と意味的制約をめぐる問題について考察を行った。まず、その多義性の要因は裸名詞の非指示性にあることを指摘した。その概念はあくまで一元的で、たとえ形容詞が付加されても、個別的にも特定的にもならない。それゆえ、冠詞に伴われることもないのである。そして、この前置詞句は二次叙述の構成要素になっているがゆえに「変化の結果の一時性」の意味的制約がかかっているわけであるが、形容詞の場合とは違って、属性を表すにもかかわらず「変化性」と「一時性」を保証するマーカーを必要としないのは、前置詞 en が抽象的な移行先を有界的に表示する機能を担っているからだということを指摘した。

フランス語からロマンス諸語への翻訳を調べても、この種の用法の en に、同根の前置詞があてられている事例は極めて少ない。印欧祖語の *en に由来する前置詞が無冠詞で普通名詞と結合して二次叙述を構成する用法は特殊な用法だと思われる。フランス語における前置詞 en の用法拡張の特殊性は、その基本用法の特殊性と無関係ではないであろう。つまり、このような周辺的用法は、メタフォリカルな概念に特化して表示するようになった前置詞 en と非指示的な裸名詞との親和性の産物だと考えられる。

この度の論考の対象は前置詞 en の特殊な用法に限定したが、この前置詞の用法は実に多様である。en の中心的な用法から様々な用法への拡張のメカニズムや、同種の新旧の前置詞の使い分けの対照研究については今後の課題としたい。

【参考文献】

Amiot, D. & De Mulder, W. (2001), "L'insoutenable légèreté de la préposition *en*", *Studii di Linguistica* 1, 9-27.

Aslanov, C. (2009), "*Comme/comment* du latin au français : perspectives diachronique, comparatiste et typologique", *Travaux de linguistique* 58, 19-38.

De Mulder, W. (2008), "*En* et *dans* : une question de « déplacement » ? ", in Olivier B., Prévost S., Charolles M., François, J. & Schnedecker C. (éds), *Discours, diachronie, stylistique du français : études en hommage à Bernard Combettes*, Peter Lang, Bern, 277-291.

Desmets, M. (2008), "Constructions comparatives en *comme*", *Langue française* 159, 33-49.

Fagard, B. & Combettes, B. (2013), "De *en* à *dans*, un simple remplacement ? : Une étude diachronique", *Langue française* 178, 93-115.

Flaux N. & Moline E. (2008), "Constructions en *comme* : homonymie ou polysémie ?", *Langue française* 159, 33-49.

Franckel, J.J. & Lebaud, D. (1991), "Diversité des valeurs et invariance du fonctionnement de *en*, préposition et préverbe", *Langue française* 91, 56-79.

Fuchs, C. (1999), "Les tours qualifiants en "comme N" : *Jean travaille comme maçon*", in A. Deschamps et J. Guillemin-Flescher (eds), *Les opérations de détermination: Quantification/qualification*, Ophrys, 63-82.

Fuchs, C. & Le Goffic, P. (2005), "La polysémie de *comme*", in Soutet O. (éd), *La Polysémie*, Paris, PUPS, 267-291.

古川直世（1984）「ゼロ冠詞について」，『フランス語学研究』 18, 70-78.

Gougenheim, G. (1950), "Valeur fonctionnelle et valeur intrinsèque de la préposition « en » en français moderne", *Journal de psychologie* 43, 180-192.

Guimier C. (1978), "*En* et *dans* en français moderne", *Revue des langues romanes* 83 (2), 277-306.

平塚　徹（2008）「フランス語の prendre タイプの動詞がとる場所補語について．非線状的事態認知モデル」児玉一宏・小山哲春編『言葉と認知のメカニズム．山梨正明教授還暦記念論文集』，ひつじ書房, 1-13.

Homma, Y. (2010), "Étude sur l'emploi de *en* devant les noms de territoire en français", *Cahiers de l'École doctorale* 139, Université de Paris Ouest Nanterre La Défense, 35-54.

Homma, Y. (2011), "Principes de fonctionnement de la préposition *en* et absence d'article dans son régime", *Langue française* 171, 77-88.

Katz, E. (2002), "Systématique de la triade spatiale *à, en, dans*", *Travaux de Linguistique* 44, 35-49.

Kupferman, L. (1991), "Structure événementielle de l'alternance un / Ø devant les noms humains attributs", *Langages* 102, 52-75.

Lakoff, G. & M. Johnson (1980), *Metaphors We Live By*, University of Chicago, Chicago Press.

Léard, J.-M. & Pierrard, M. (2003), "L'analyse de *comme* : le centre et la périphérie", *La syntaxe raisonnée*, in Hadermann P., Van Scijcke A. & Berré M. (éds), De Boeck-Duculot, 203-234.

Leeman, D. (1995), "Pourquoi peut-on dire *Max est en colère* mais non **Max est en peur* ?: Hypothèses sur la construction *être en N*", *Langue française* 105, 55-69.

Leeman D. (1997), "Sur la préposition EN", *Faits de Langue* 9, 125-144.

Leeman, D. (2013), "Pourquoi peut-on dire *être en faute, être dans l'erreur*, mais non **être dans la faute*, **être en erreur* ? ", *Langue française* 178, 81-92.

Martinie, B. & Vigier, D. (2013) : "Le régime nominal de la préposition *en* dans la construction *être en + N abstrait* : une étude aspectuelle", *Langue française* 178, 59-79.

長沼圭一（2003）「役割記述機能を持つ無冠詞名詞句について—quand on est femme, on ne dit pas ces choses-la—」『フランス語フランス文学研究』83, 90-100.

長沼圭一（2010）「フランス語における属詞位置に現れる形容詞付きの無冠詞名詞について」『愛知県立大学紀要言語・文学編』42, 113-135.

小熊和郎（2000）「前置詞 en の制約と働き」『フランス語学研究』34, 50–55.

奥野忠徳（2013）「英語前置詞 IN の意味分析」『弘前大学教育学部紀要』110, 107-116.

Pierrard, M. (2002), "*comme* préposition ? Observations sur le statut catégoriel des prépositions et des conjonctions", *Travaux de linguistique* 44, 69-78.

坂原　茂(2012)「フランス語コピュラ文の解釈と属詞の冠詞の有無」『フランス語学の最前線』1, ひつじ書房, 1-52.

敦賀陽一郎（2010）「現代フランス語の前置詞 en の統辞機能と用法（定冠詞 le, les との共起性に注目して），東京外国語大学論集 80, 229-272.

Takemoto, M. (1995), "L'attribut indirect: fonction et contraintes sémantiques", *Études de Langue et Littérature Françaises* 66, 206-218.

Tamba-Mecz, I. (1983), "La composante référentielle dans « Un manteau de laine » « Un manteau en laine » ", *Langue française* 57, 119-128.

東郷雄二（1993）「指示と照応— 照応的代名詞 IL と CE の用法を中心に」『フランス語とはどういう言語か』, 駿

河台出版社, 75-94.

Vigier, D. (2003), "Les syntagmes prépositionnels en *en N* détachés en tête de phrase référant à des activités, *Lingvisticae Investigationes* XXVI-1, 97-122.

Vigier, D. (2004), "Contribution à une étude des constructions antéposées du type : « En homme intelligent et humain, il partagea tout de suite l'inquiétude de Marcel » (J. Verne) ", *Discour* 2.

Vigier, D. (2008), *Les groupes prépositionnels en « en N » : de la phrase au discours*, Thèse de l'Université Paris 3-Sorbonne nouvelle.

Vigier, D. (2013a), "Comportements, déguisements, rôles de fiction...: De quelques emplois de la préposition *en*", *Lingvisticae Investigationes* 36, 1-19.

Vigier, D. (2013b), "Sémantique de la préposition *en* : quelques repères", *Langue française* 178, 3-19.